

電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

第八回

第八章 電力は面白い

1

必ず儲もうかります、これは絶対買いですなどという話には、ろくなものはない。

世の中に絶対などはないと言ってしまえばそれまでだが、そんなに美味うまい話なら他人に言わず、独り占めにすればいい。

そうしないには理由がある。それは美味しい話を持ち込んで、逆に相手から美味しい汁を吸おうという魂胆こんたんがあるからだ。

世間の人はこの手の話に乗って騙だまされたり、大損をしたりする。後悔先に立たずだが、どうして乗せられてしまうのか。

それはあんな奴が儲けるなら、賢い自分ならもっと儲けられるという傲慢ごうまんさや、あいつに儲けさせてなるものかという対抗心がむく

むくと湧き上がって、抑えることができないからだ。

日本一の三菱財閥を作った岩崎彌太郎いわさきや たろうの運が開花したきっかけに、三つの買い物がある。それは岩崎が望んで買ったものではない。すべて消極的な気持ちで引き受けたものが大きく化けたのである。

横浜上海航路シヤンハイが、まず一つ目の買い物だ。大久保利通おおくぼとしみちに勧められた岩崎は、横浜上海航路に八十四万ドルを投資した。その際、政府から船舶の払い下げを受けたのだ。横浜上海航路は隆盛を極め、保有する船舶は四十隻せきにもなった。

これによって岩崎は日本の海運王になったのだが、深刻に悩んでいることがあった。それは、政府から払い下げを受けた船舶の扱いについてである。

実は、政府から払い下げられた船舶は、どれもこれも老朽化したボロ船ばかり。押し付けられたも同然だった。廃船にするにも巨額の費用がかかる。さてどうしたものかと岩崎は悩んでいた。

そこに降って湧いたのが、共同運輸会社の設立だ。井上馨いのうえかおるは、大久保と組んで岩崎が儲けていると面白くなかった。大久保が生きている間はどうしてもなかったのだが、彼が紀尾井坂きおいざかで凶刃きようじんに斃たおれると、渋沢栄一しぶさわえいいちらを焚たきつけて共同運輸を設立し、岩崎に対抗したのだ。岩崎は、この争いの最中に亡くなるが、跡を引き受けた

彌之助やのすけは共同運輸会社と和解し、会社を合併して日本郵船を設立した。

一見、岩崎側が敗北したと見えるが、実際はそうではない。日本郵船が設立されたおかげで、ボロ船が処分できたのだ。ボロ船を日本郵船に引き取らせ、それが株に代わり、値上がりし、三菱の財産はますます大きくなったというわけだ。

そのほかの高島炭鉱や、丸の内の地所も、三菱はむりやり押し付けられて購入したようなものだが、それが財産を増やす元になっているから、面白い。

こうした幸せは、欲の皮のつっぱった者にはやってこない。やはり陰徳を積んだ者に来るのだろう。三菱は、よほど陰徳を積んでいるにちがいない。

私は、陰徳を積んでいるとは言えないが、やはり私も気が進まないながらも引き受けた事業に福があるような気がする。

これで陰徳を積んでいれば、財産を膨らますことができるのだが、そこまでは無理だろう。高望みというものだ。人というのは、分相応という気持ちを持っていれば、大きな失敗はしない。

さて松永安左まつながやすざえもん工門だが、彼は楽天家で、山っ気があり過ぎる。実務には長たけているのだが、ちよつとせつちかなのだ。だから私と違って儲け話にすぐに手を出してしまう。

綿糸や石炭の失敗に懲りず、松永は新たにコークスに手を出したのだ。

今度は失敗するなと私は言った。すると松永は、殊勝しゆしやうな顔つきで、「ようやく目が覚めました。商売は正直、正確が最も大事である。それが信用に繋がるのだと確信しました」と答えた。

松永は、自分が失敗を重ねてきたのは、知力や気力が他人より足らなかったからではない、人間として大きな欠陥があったと気づいたという。

私に語り掛ける目は濁りにごがなく澄み、悟りを拓いた僧を見るようだった。

「欠陥とは？」

私は聞いた。

「人間が生まれてきたのは商売をするためでも、金をためるためでもないと思うんです。難しいことはわかりませんが、まず自分の生活を立て、その後は他人のため、社会のため、国家のために奉仕するために生まれてきたんです」

「そうかもしれん」

「それぞれに使命があります。それを果たすには道があります。正直、正確の道です。確実に、その時、その日のやるべきことを成し遂げるのです。決して無理したり、急いんだり、今日を忘れて明日に

手を出そうとしないこと。そんなことをするから足元から崩れるんです」

「その通りだよ」

「とにかく正直、正確の道を確実に歩み、他人の信用を獲得すれば、大実業家にも大金持ちにもなれるが、ただし最初からそれが目的になってはならない……」

「松永君、よくそこまで悟ったね」

私は彼を褒めた。

数々の失敗は、松永の中で無駄にはなっていない。それらは松永を大きくするための通過すべき道だったのだ。

「ありがとうございます。桃介さん、またお願いに参ります。これからは新しい松永です。世のため、人のために働くようにします」

こう宣言して、松永は九州に戻り、事業に邁進し、信用を高めた。人づてに聞くとところによると、私に言ったほどは悟っていなかったようだが……。

面白い話があると、私の名前を出して、福澤桃介ふくさわももすけが支援してくれと、自分の信用の補完に使っていたようだ。私が相場で大きく稼いだことは広く知られており、私のような軽薄な男でも、松永の信用が上がるらしい。

九州は松永の地元である。彼にしてみれば苦勞、失敗の果てによ

うやく力が発揮できる場所を得たのだろう。

九州で博覧会が開催される予定がある。それに向けて市街電車を走らせたいとの企画が有志の中で盛り上がった。

そこで私と繋がりのある松永に相談があったようだ。松永もかねてより市街電車に関心があったため、いつものようにすぐに飛びついた。彼の新事業に向かう意欲には、敬服しかない。

私は福博電気軌道ふくはくへの出資に合意した。即座に、松永は地元への説得に奔走する。

福岡県庁前から博多駅までを第一期工事としていたが、明治四十年（一九〇八）の暮れには認可され、翌年に会社設立となった。

払込資本金は六十万円であるが、私が筆頭株主であり、社長に就任した。実務は専務の松永が担当した。

松永は、私の期待以上の働きを見せた。敷設工事ふせつは約五カ月程度で完了し、無事、博覧会に間に合った。

この成功は、私に思わぬ僥倖ざうしやうをもたらしたのである。

私への世間の評価は、大いに株で稼いだため、相場師とさげすまれた目で見られる向きがあった。また、丸三商会破綻で受けた信用絶無の評価も回復したとは言えなかった。

ところが電気軌道という実業で成功を収め、博覧会という多くの人が喜ぶ事業に花を添えた結果、私の評価は大いに高まったのである。

る。とはいえ、まだ完全に信用を回復したとは言えないが……。

2

私の評価が高まったことは、予想もしていなかった幸運だった。

実は、松永に「出資を止めたい」と言っていたのだ。理由は簡単だ。儲かる気がしなかったからだ。

世の中は急激に不景気の様相を呈し始めていた。

にっしん

にちろ

日清、日露と戦争に勝ち、国内は勢いづいているかに見えたが、

ロシアから賠償金を獲得できなかったため対外債務は膨らみ、日本経済は低迷していた。戦後不況である。

7

一方で、綿糸などの軽工業から製鉄などの重工業への転換が進められ、鉄道や電力などへの需要が膨らみ、それに応える会社が幾つも設立されていた。私にも出資要請が多く舞い込んできた。

このような状況を見て、日本経済は、戦後不況を脱して好景気に進むと予測する者もいたが、私には不安しかなかった。

私は、軽薄であるが慎重である。それで相場で損をすることなく、逃げの桃介という異名を取るほどに成功したのである。失敗する、損をするという勘が働いた時は、投資を避けるというのが鉄則だ。そのためには恥も外聞も、友情も親戚付き合いもない。

「ええっ、そんな、桃介さん、今更何を言うんですか」

私の出資取り止めの話を聞いて、松永は青ざめた。

「とにかく、止める。君も、失敗したくなかったらこんな事業から手を引きたまえ」

「よしてくださいよ」松永は泣きそうな顔になった。「桃介さんが出資するっていうから、他の人も出資してくれるんですよ。もし、桃介さんが手を引いたら、みんな逃げ出してしまいます」

「止める、と言ったら止める」

「もう後には引けません。認可も下りたんです。それも皆、桃介さんが経営に参加するからです」

「それほど信用されているとは思わなかった。悪いね」

私はその場を立ち去ろうとした。松永は私の服の袖を掴み、「私は、この事業にかけているんです。もしこれが駄目なら、腹切って死にます」と声を荒らげた。

「こんなことで死ぬ君じゃないだろう。また他にいい話があれば、乗るよ」

私は、松永の手を払おうとした。

「桃介さんは、実業界に打って出ようとされているんじゃないですか。相場師のまままで終わるんですか。福博電気軌道の社長になることは実業界に羽ばたく絶好の機会です」

松永の声がどんどん大きくなる。

「潰れる会社つぶの社長になるより、相場師の方がいいね」

「この事業を止めるなら、福岡市に五万円の罰金を支払わねばなりません。それでもいいんですか」

松永の目が座った。なんとしてでも私を逃がさない覚悟だ。

「罰金を払えばいいじゃないか。六十万円の資本金だろう？ 一万二千株の内、仮に私が半分の六千株を持ったとして、一株十円の損を出したら六万円の損だ。それよりも損をする可能性だってある。だったら今、五万円払って、頭を下げた方がいい」

私は、松永に冷静になるように言った。

松永は、私が株を売却した方がいいと忠告したのに、まだまだ上がると買いに走って、無一文になった。そのことを思い出させようとしたのだ。損をする可能性があるなら、思い切って手を引かねばならない。

雪山に登る時、もう少しで頂上に到達するとしても、天候が悪化し、遭難する可能性があるれば、撤退するのが本物の勇者であるなどとも言った。

しかし松永は一步も引かない。絶対に事業を完遂かんすいし、成功してみせると言う。男として面目が立たない。東京で上手く行かなくて、自分の故郷で捲土重来けんどきせうらいを誓ったのである。地元の有志にも、電気

軌道の事業を自分に任せてほしいと頭を下げてきた。それを今更、裏切るわけにはいかない。死んでもやる……。

私は困った。

松永は、私にとってかけがえのない友人である。何かにつけて彼は私を頼りにしてきたし、私も彼を頼りにしてきた。丸三商会では迷惑もかけた。その彼が地元九州で一旗揚げようとしている。それを見捨てれば、松永という友人を失うことになる。金は失っても取り戻すことができるが、友人はそうはいかない。

日清紡績株のことを思った。あれを売りそこなったのは、私らしくもなく実業界に地歩を築きつけにしようという判断を働かせたためだ。相場師なら、そうした雑念を打ち払わねばならない。雑念が紛れ込んだ時が、敗北の時である。

今回は、どうだろうか。相場師としてなら損をする可能性のある事業からはすっぱりと手を引くべきである。それによって松永との友情を失っても仕方がない。

私は、迷った。その時、ふと天啓が降りてきたような気持ちになった。損をしても、たいしたことはないではないか。仮に千株引き受けて、それが全でなくなっても五万円だ。罰金と同額であり、私の懐ふところがそこまで痛むわけではない。相場師としての名前が少し傷つくだろうが、それもたいしたことではない。

私も四十一歳となった。孔子こうしに言わせれば、四十にして惑まじわずである。人生の方向を定める年齢なのだ。

「わかった。君の熱意に負けた」

私は、松永に私らしくもない言葉をかけた。

「ありがとうございます」

松永は、私の服の袖を引きちぎらんばかりに引っ張る。

「おい、おい、服が破れるではないか」

「やっぱり桃介さんだ。私を見捨てることはない」

松永は破顔一笑である。先ほどまでの鬼気迫る顔はどこかに消えてしまった。こういうところが彼のいいところだ。切り替えの早さが好ましい。

「一割とは言わないが、八分くらいは配当してくれよ。その線で、私も出資者を募るから」

「任せてください」

松永には秘密だったが、この段階で私は出資者の目星をつけていたのだ。

私は早速、動いた。決断すれば速い。それが私のいいところでもある。

それにしても松永は本気だ。彼は相場師としては全く才能がないが、政治家になればいいと勧めたのは的確だった。

人をまとめる才能がある。松永にほだされた形ではあるが、私が出資を再度、決断すると、たちまち地元有志をまとめ上げた。私は後に引けない。そこで幾人か慶應閥を頼りに出資者を募ったが、誰も乗ってこない。やはりあの男に頼むしかない。松永に出資を約束した際に、思い浮かべた人物に会った。

彼の名は、岩崎久彌である。三菱財閥の総帥。創業者である岩崎彌太郎の長男である。

久彌とはアメリカ留学中に懇意になった。彼は、アメリカで不遇のうちに客死した福澤門下の馬場辰猪の葬儀を執り行い、墓標を建立するなど、情に厚い人物である。必ず私の立場を理解して出資してくれると確信していた。

私は、義兄捨次郎を介して、久彌に会い、福博電気軌道への出資を依頼した。彼は、私の説明を聞いただけで即座に「わかりました」と言い、二千株を出資してくれたのだ。さすがである。くどくどと条件を並べたり、役員にしろと言ったり、私のように配当を気にしたりするようなケチなこともない。

逃げの桃介と言われ、決して世間の評価が高くない私を完全に信用してくれたのである。

感謝しかない。私は久彌を見ていて、とてもかなわないと思っただ。私のように、川越の水のみ百姓の生まれからなんとか這い上が

ろうと足掻あいでいる者とは違う。

彌太郎、そして叔父の彌之助が築いた三菱財閥を二十九歳で継承し、それをさらに大きくして盤石ばんじやくにしただけのことはある。

私と久彌とは、最初から立っているところが違う。彼は私より数段高い階段の上から、頂上に向かって歩いている。私は、階段の下も下、見方によっては地下室から這い上がって、頂上を目指して駆けている。私は焦り、喘あえぐことがあるが、彼は汗一つかいていないように見える。

羨うらやましいと思わないでもないが、人にはそれぞれの運命が定まっていると思うしかない。私は私のやり方で頂上を目指すのだ。結果として頂上を極められなくても、それはそれでいいではないか。

3

私は久彌と同数の二千株を買った。最終的には久彌の他に二、三の知人が出資に応じてくれ、福博電気軌道の過半数の株を押さえることができた。

会社は無事設立され、私が社長、松永が専務となり、実務を執りしきるようになったのである。

電気軌道はたった六カ月で完了し、博覧会に間に合わすことがで

きた。

これが評価され、株価は大いに上昇し、五十円の株が一気に百円にも騰貴したのである。

株が騰貴したことは非常に嬉しい。しかしそれよりも嬉しいのは、私に不思議な感情が湧き上がったことだ。

私たち関係者ばかりではなく大勢の観客が見守る中を、一番電車が発車する。窓から乗客が私たちに手を振る。どの顔もはちきれんばかりの笑顔だ。期せずして観客が一斉に万歳を叫ぶ。気恥ずかしくはあったが、私も両手を思いきり上げて、万歳、万歳と叫んだ。嬉しかった。株価が上がるのとは、全く違う喜びだった。

株の値上がりは私だけの喜びだ。私が喜べば、間違いなく誰かが怒り、悲しみ、嘆き、恨んでいる。儲かった私に嫉妬や恨みの視線を送りこそすれ、感謝されることはない。

ところが電車が無事に走ると、乗客も観客も、皆、喜びに溢れ満面の笑みだ。私に向かって握手を求めてきて、ありがとう、ありがとうと何度も感謝を伝えてくる。中には涙さえ流している者もある。

「桃介さん、良かったですね。無事に電車が走っていきます」

松永もやや疲れた顔に満足そうな笑みを浮かべた。

「松永君、君の成果だよ。私は何もしていない……」

私は謙虚に言った。

「そんなことはありません。桃介さんが出資者の筆頭になってくださったから成功したんです」

「これからどうする？」

「九州には電気会社がいくつかあります。皆、小規模です。これでは住民の福祉や産業発展には心もとないと思います」

「それらをまとめ上げるのか？」

「そのつもりです。福博電気軌道の成功のおかげで、私のところに役員に就任してほしいという依頼が次々舞い込んできていますのでね。桃介さん、これからも出資の方はお願いします」

「実業には株式投資にない充実感というか、喜びがあるとわかった。出資を検討する」

私は松永に言った。

松永は納得したように大きく頷き、「私も、今度は本腰を入れて実業界で名を上げます。今までのように金儲けや成功ばかり夢見ません。人のために尽くします」と言った。

「悟りを拓いた通りだね」

「桃介さんも実業の世界で活躍しましょう。二人で電力をやりましょう」

松永の話に大いに触発された。

「しかしなあ、私は岩崎彌太郎にはなれないな。都落ちと言われても地方から東京に攻め上がると君は言っていたが」

「何を弱気なことを言うんですか。桃介さんには実業家の才能があります」

「いや、君は大実業家か大政治家になれるだろう。この九州を固めればね。私は、なれても中途半端かもしれない。しかしそうは言うものの、私も電力にかけてみようと思う。これからの産業発展には電力が安定的に供給されねばならない。それが今回でよくわかった。電力は、儲けは薄くとも広く世間の役に立つ事業だ。どうせやるならそうした事業がいい。もしそれに成功しても、私には三菱財閥は作れないと思うがね」

「私は、九州の電力をまとめ上げます。桃介さんは、もっと広い地域の電力をまとめてください。これからは電力の時代です。一緒に大きくなりましょう」

「私も電力をやる。しっかりと事業はやるが、財閥なんてものを作る気がないという方が正しい。私は生来、飽きっぽいから、今は電力と言っているも明日になれば変わるかもしれない。いずれにしても簡単に金持ちになってしまったことが面白くないんだ。飽きてしまった。金持ちになってみると、楽しくはないことがわかった。だから金持ちになるより、楽しく仕事をしたい」

私の言うことが松永に伝わったかどうかはわからない。私の言いたいことは、財閥は結局のところ自分の家の資産を増やしている。しかし私は、もうこれ以上、自分の資産を増やす気がない。楽しくないからだ。面白くないのだ。こんな気持ちになったのは、なぜだろうか。電車に乗って、喜びを満面に湛^たえた笑みで私に手を振る乗客を見たからだろうか。

私になりたかったのは、金持ちなのだろうか。貧乏は嫌と言うほど経験した。だから金持ちになりたかった。しかし、実際になってみると、それほど楽しくも、嬉しくもない。むしろ空しい。それよりは、あの電車に乗って手を振る人の笑顔を一つでも増やす方が価値がある生き方であると思ったのだ。これこそ天啓というのだろうか。

4

私が金を儲けただけなら、いとも簡単なことなのである。私は、相場師として名を上げた。金を持っていると思われている。それで起業したいという連中が私のところに集まってくる。名前を貸してくれというのだ。私は彼らの事業のことなど、これっぽちも知らないし、関心がない。しかし、私が名前を貸し、発起人

に名前を連ねると、彼らは私に千株、二千株を提供してくれる。

発起人に私の名前があることで、有望な会社であるとか、運のいい福澤桃介にあやかりたいという投資家が、その株を買う。それだけで、株が相場すれば値が上がり、私は儲かるという訳だ。

こんな馬鹿げたことがあるか。私はなんの汗もかいていない。ただ彼らの発起人に名を連ねただけだ。

今の世の中、少しおかしい。金持ちは、ただ金持ちであるというだけでますます金持ちになり、貧しい者はどんなに努力しても貧しくなる。

私は福澤先生の娘婿むこになり、米国留学をさせていただき、なおかつ株投資で儲かった。これは私の努力の結果だ、などというような傲慢さは持ち合わせていない。たまたまの幸運だろう。もしかしたら不幸と紙一重だったかもしれない。

もし私のように汗をかかないで金儲けをしたいと思うなら、儲かっている、あるいは金がある振りをすればいい。詐欺さぎだとなんだと言われようと、他人に「金を持っている」「運のいい人間だ」「成功者だ」と思わせればいいのである。

世間にはそんな連中は山ほどいる。彼らの実際の懐具合も、成功の実態もわからないし、突き止めようという者もない。風評が立てばいいのだ。

私は、信用絶無という悪評をまき散らされ、大変な苦労にあったが、その逆をやればいいのである。

成功者である風評が立つだけで、金が集まってくる。その結果、あつという間に財産ができてしまう。次はそれを踏み台にして、さらに増やせばいい。高い階段を勢いよく上っていくことができるだろう。

この世には、格差がある。

明日の米がなくて苦勞している者もいれば、札束を燃やして米を炊く者もいるのが、今の世の中だ。金持ちは、樂をしてより金持ちになり、貧しい者はどんどん深い沼に落ちていき、足掻いても足掻いても、やがては頭まで沈んでしまう。

成功者は勞せずして金儲けができてしまう。私がそうだ。それは空しい。少しも樂しくない。

そんな金は、悪銭ではないが、身につかない。よほど注意していないとたちまち失ってしまう。いったい何のために金持ちになったのかと思った時は、後の祭りである。

私は、幸いにも慎重で臆病であるおかげで、今も生活に困らぬ程度の金だけはなんとか失わないでいる。

私の経験から言えることは、ただ一つ。勞せずして金持ちになりたいと思っている者がいたら、即刻、考え直すべきであるということこ

と。

三菱財閥の総帥である岩崎久彌が、私に嘆いたことがある。

「自分は生まれながらにしてこの財産を得たが、さてこれを経営するのに実に忙しい。おまけになんだかんだと慈善に消える金が、一家の生活費以上になるのにもかかわらず、世間からは悪く言われる。金持ちほどつまらぬものはない」

日本一の金持ちでさえ不満があるのだ。これを金持ちゆえの贅沢ぜいたくな不満だと言うのは勝手だが、金を儲けたい、労せずして金持ちになりたいなどという人生になんの意味があるというのだ。

金を持って死ねるわけではない。三途さんずの川を渡るのには六文もんあれば足りるのだ。

私の今の願いは、もつとひりひりとした、魂を震わすような人生に足を踏み入りたいというものだ。破産の危機を目の前にした冷や汗であつてもかまわない。

それが世間の人に感謝されるならば、さらに嬉しい。私は、相場師としてよりも実業家として評価されたいのだ。

実は、福博電気軌道と関わり合う前から、私のところには電力関

連の会社の出資話が多く持ち込まれていた。

さほど関心がなかったのだが、頼まれれば仕方がないので豊橋電とよはし気や高松電気軌道の株主になり、取締役に名を連ねていた。

しかし福博電気軌道の成功で私は変わった。松永は九州で電気会社をまとめて、事業を拡大すると言う。こんどこそ松永は成功するだろう。

ならば私も、という気になったのである。

電力は、日本国家の発展のため、かつ国民の生活を豊かにするために絶対に必要である。

そして電力を金儲けの道具にしてはならない。電力は、経済を豊かにする、すなわち経世済民のために安価で、安定的に供給されるべきである。ようやく私に明確な目標ができた。

明治四十二年（一九〇九）三月、名古屋電灯の株主になってほしいとの依頼があった。

慶應義塾出身の友人、矢田やだせき績からの依頼だった。

矢田は、時事新報の記者をやったり、山陽鉄道に勤めたりしたが、中上川なかみかわひこじろう彦次郎に誘われて三井銀行に入行し、名古屋支店長となっていた。

矢田によると、名古屋電灯は非常に可能性のある会社なのだが、内紛で成長が阻害されているようだ。

矢田は「経営者に人さえ得ることができれば、この会社は良くなる。天にも昇る龍となる」と強調した。

会社とは外的成長阻害要因、たとえば不景気、戦争、災害などだけで経営悪化に陥るのではない。内的成長阻害要因、たとえば縁故ばかりが出世する、横領、会計不正などでも経営悪化するのである。

内的成長阻害要因を発見し、除去すれば、経営はたちまち好調に復することになる。

同社は明治二十年（一八八七）に設立許可が下り、同二十二年（一八八九）、日本で五番目の電力事業者として一般送電を開始した名門企業である。

しかし、武士の商法と言うべき会社で、明治維新で失業した尾張藩の武士たちが政府から八万五千円を借り、それに自己資金を足して設立したのだが、船頭多くして船山に上るの喩えの如く、非効率かつ内紛が絶えなかった。

「名古屋電灯を龍にできるのは、福澤桃介、その人以外にない。ぜひ経営に参画してほしい」

矢田は私を熱心に口説いた。彼は、福博電気軌道の経営を成功させつつある私の手腕を見込んだと言った。

福博電気軌道の成功は松永の実績なのだが、私の評価も引き上げ

てくれたようだ。

私は、名古屋という土地に興味を覚えた。東西の結節点であり、戦国時代を終わらせ、天下統一を果たした織田信長、おだのぶなが豊臣秀吉、とよとみひでよし徳川家康を生んだ土地である。がわいえやす勝手な想像だが、私に相応しい気がしたのである。松永が、都落ちと言われても地方で力をつけて、東京に攻め上ると言ったが、まさにそれに相応しい土地であると直感したのだ。

名古屋電灯の経営に参画することを私は快諾した。すぐに二千株取得し、明治四十二年七月には顧問に就任した。

その後も株を買い増し、明治四十三年（一九一〇）には一万株を取得した。さらにその年の一月、定時株主総会で取締役に選出され、五月には常務取締役となった。

まさに電光石火。私は、名古屋電灯の総株数のほぼ十分の一を所有する大株主として経営の実権を握ったのである。

以前、松永と組んで利根川とねがわ水力発電所設立に動いたことがあった。あの際は、地元の協力を得られなかったこともあるが、私自身、電力にそれほど熱意はなかったため、すぐに手を引いた。

しかし水力発電に関心を持ったのは、もともと福澤先生がきっかけだ。福澤先生は、日本に無限にある資源は水である。石炭はいずれ尽きる。そうになると、外国に依存しなければならない。だから火

力発電より水力発電に力を入れるべきだ。このように時事新報に書かれていた。私はこれを読んで、利根川水力発電所設立に動いたのだが、今こそ水力発電の時代が到来したのだ。

日露戦争に勝利し、日本がこれからさらに発展するにつれて電力需要が大きくなる。そのためには火力発電より水力発電を強化しなければならぬ。

問題は、技術的な問題から送電が近隣に限られるということだった。これでは小規模な発電所を幾つも建設することになり、利用者に安価で安定的な電力を提供しながら会社が利益を上げることが不可能だ。

経済には、規模の利益ということがある。大規模にすればするほど、コストが下がるために事業として成功の可能性が高くなるのだ。

この問題は、海外で遠距離送電が可能になったとの情報を入力し、解決可能となった。

事業に変革をもたらすのは、いつでも新しい技術である。新しい技術なき経済の発展は、本物とは言えない。

遠隔地で発電して、需要の多い工場や都市に電気を送る。これが実現すれば、どれだけ日本の発展に寄与するだろうか。

この構想を実現しようと考えた際、私は長野県の山中から急流を

成し、伊勢湾に注ぐ木曾川のことを思った。名古屋電灯に出資を決めた際に水力発電の適地を探し、木曾川沿いを歩いたのだ。この川こそ水力発電の最適地であると確信した。

残念なことに名古屋電灯は火力発電である。私は早期に水力発電に切り替える必要性を感じていたが、なんと競合相手である名古屋電力が、木曾川沿いの八百津で発電所建設に取り組んでいたのだ。

名古屋電力は、名古屋電灯の二倍の資本金であり、大株主に渋沢栄一など大物を並べていた。このまま水力発電所の建設が順調に進むと、名古屋電灯などひとたまりもない。

幸い八百津発電所建設に苦慮しているようである。私は、この機をのがすものかと名古屋電力との合併に動いた。

何度も言うが、私は軽薄である。軽薄の良さは、動き出すと早いこと、そして失敗を恐れないことである。失敗するかもしれないとぐずぐずしているうちに機会を失ってしまう。

私は、他人の評判や失敗を恐れない。やると決めたら、すぐに動き出す。名古屋電力に渋沢らの大物が名前を連ねていようと関係ない。名古屋電力と合併すれば、競合相手がいなくなると同時に、水力発電も手に入る。一石二鳥である。失敗すれば、その時はその時だ。また考え直せばいいだけだ。動く前から、失敗を恐れるな。

私は名古屋電力と合併交渉に入った。競合しても共倒れになる可

能性が高いなど、合併の合理性を相手に説明した。

私の信用は、まだ今一つであることが交渉の過程で分かった。私は相変わらず相場師と見られていたのである。

しかし、それに腹を立てるような私ではない。こんなことは百も承知である。

私の信用の補完をしてくれたのは、福博電気軌道の出資で助けてくれた岩崎久彌である。

実は久彌は、名古屋電灯の株を買い占める際も、私を資金面で援助してくれたのである。

私と久彌は、性格などは大きく異なる。私は、目立ちたがり屋であるが、久彌はそうではない。決して表に出ようとしらない。

私の事業に関係することで儲けようとか、役員になろうとかそんな要求は一切しない。

評判が盤石でない私を支援することで、彼の評価が上がるわけでもないのに、素のままの私を評価してくれる。私は、いくら感謝しても仕切れないと思っている。

久彌が私を評価してくれるのは、馬場辰猪のことがあるからかもしれない。私はアメリカ留学中に不遇だった辰猪を応援し、一緒に各地を巡業したこともある。不遇の人物を損得抜きに応援する私を見て、信用できると思ってくれたのだろう。

久彌が私の後ろにいることが、そのうち名古屋電力の株主たちに伝わった。実際は、私が伝わるように仕向けたのだが……。

久彌の名前はさすがである。たちまち効果を發揮し、渋沢など大物株主たちが続々と名古屋電灯との合併賛成に回った。

私は名古屋電力一株につき名古屋電灯二株を割り当てることで名古屋電力の株主を納得させ、明治四十三年七月、名古屋電力を円満に吸収合併したのである。

いよいよ経営の責任者として、名古屋電灯を水力発電に向けて大きく事業転換させる時期が到来したのだ。目標を見つけ、それを実現する会社も手に入れたことで私の事業欲が大きく膨らんだのである。

6

名古屋電力を吸収合併し、資本金七百七十五万円の一大電力会社となった名古屋電灯の経営は、順調に軌道に乗るかと思われた。

しかし名古屋という土地柄は想像以上に閉鎖的というか、気位の高い土地だった。

織田家に仕えた清洲きよす以来の武家、商人がいれば、徳川家に仕えた

三河みかわ以来という武家、商人たちがいる。彼らはそれぞれが自分たち

の由緒に誇りを持ち、本音では反目しあっていた。

では私に対する態度はどうかと言えば、株主や重役たちは、結束して徳川御三家尾張六十二万石の顔を見せるのである。

私は、川越の水のみ百姓の出身である。

名古屋電灯と名古屋電力との合併を円満に成し遂げた私に対する視線は冷たく、厳しい。東京のどこの馬の骨だかわからない奴が名古屋で金儲けしようとしてやってきたといった視線なのである。

福澤桃介という男は相場師ではないか。真面目に経営をする気などありはしない。株価を引き上げて、さっさと売り逃げするつもりだろう。山師だ。買い占め屋だ。乗っ取り屋だ。あんな奴に経営を任せるわけにはいかない……。

私に対する悪口、中傷が沸々と湧き起こってきたのである。これは私の不徳の致すところでもあるが、組織というのはすぐに弛緩し、混乱に至るものなのである。

会社といっても人間が構成している組織である。合併という経営危機と言わなければならない状況に際しては統率者の話に耳を傾け、結束してなんとか乗り切ろうと思うのだが、それが去ると、その気持ちは一気に萎え、弛緩してしまう。

自分たちで上手くやれると思えば、統率者への感謝の気持ちをなくしてしまうのである。これが多くの会社、あるいは組織の混乱の要

因だ。彼らは、私を排除して自分たちで名古屋電灯を経営しようと考えたのだ。

もう一つの要因は、私のことが恐ろしくなったのだろう。これは自慢しているわけではないが、私が鮮やかな手際の良さで、名古屋電力を吸収合併したのを見せつけられたからだ。このままでは自分たちがどこに連れていかれるかわからないという恐怖心を抱くようになったのだろう。

小心者たちが陥る陥穽^{かんせい}である。ある場所に留まれば、確実に死が待っているのに、そこから動くことができない。勇気のある者は、動き出し、窮地を脱するというのに……。私は、彼らを大きな未来に連れて行こうとしているのだが、彼らは、今の場所から動きたくないと言うのだ。

その結果、私の電力にかける意気込みなど誰も聞く耳を持たなくなった。

私には壮大な夢がある。

名古屋電灯は、合併したものの名古屋という地方都市の小さな電力会社に過ぎない。

しかし、私はこの会社をいずれ日本一の電力会社に育て上げるつもりである。

可能性は十分にある。なにせ木曾川など、電力を無尽蔵に生み出

す河川を背後に控えているからだ。そこで発電し、消費地に送電する発送電一体の会社にすれば、港湾に最適な海に面した名古屋地区は、豊富な電力を活用して一大工業地帯に成長することだろう。

そして将来的には松永の経営する九州電気などと合併し、東京電灯をも吸収してしまうほどの大電力会社に育て上げるのだ。

私は彼らに夢を語った。

しかし彼らは私の夢を聞けば聞くほど、私を胡散臭い目で見るのである。

私から言わせれば、彼らこそ株の値上がりを期待するだけの卑怯な連中である。彼らはそれに気づかない。

合併後の株主総会が近づくと、私を排除しようとする彼らの動きは露骨になった。

私に反対する重役たちは、株主たちを説得し、私の排除に賛成するように委任状を集め始めた。

勿論、私にも味方がいないわけではない。私に経営を任せようとする賛成派重役たちも、委任状集めに奔走し始めた。

反対派、賛成派の対立はいよいよエスカレートし、株主総会の当日を迎えた。

両派の対立が血を見るような騒ぎになるのを警戒し、警察官の出勤を依頼したほどだった。

株主総会が開かれた。私は議長を務めたが、会場は怒号に満ち、定款改正ていかんなどの議案も賛成、反対が拮抗し、このまま強行採決すればどのような事態を招くかわからない様相を呈していた。

会場内には誰が雇ったのか知らないが、明らかにゴロツキと思われる者たちが陣取って、周囲に睨にらみを利きかせていた。彼らは、椅子に反り返るようにして座り、議事を進行しようとする私に向かって「乗っ取り屋」「山師」などと大声で叫んだ。

最近、こうしたゴロツキを雇って株主総会を仕切ろうとする経営者がいることは知っている。そんな経営者は失格である。損を出したならば、正直に報告し、その原因を説明すればいいだけだ。それなのにゴロツキを雇って、批判を封じようなどとするのは言語道断である。

ゴロツキたちは、私の議事進行を妨害することで株主総会の成立を阻止するつもりなのか、あるいは私に株主総会を進行する能力がないことを証明したいのか、どちらかだろう。

私は、採決を諦め、結論を先送りすることにして株主総会をとりあえず終了した。

議長席を離れる私に向かって、罵声ばせいが浴びせかけられた。私は腹立ちを抑え、後ろを振り返らず会場を後にした。

私は、覚悟を決めていた。名古屋電灯が私を真しんに必要とするかど

うかを試そうと思ったのだ。

総会が終わり、ようやく会社内が落ち着きを取り戻したかに見えたが、社内の賛成派、反対派の亀裂は深かった。

明治四十三年十一月、私は名古屋電灯の経営の責任者である常務取締役を辞任し、一介の平取締役におりた。後任の常務の席を名古屋電力出身の取締役に譲ったのである。

賛成派、反対派ともに私の突然の辞任に驚いた。しかし反対派たちは、自分たちの勝利に凱歌がいかを上げた。当然の成り行きだろうが、勝手にしろというのがその時の私の心境である。

なんの夢も構想もなく会社経営などできるものか。やれるならやってみろ。こんな思いである。

私の方は、わずらわしさから解放され、夢の実現に向けて一步を踏み出すことにした。

木曾川流域をわらじ履きで歩き、発電の適地を探查するための行動を起こしたのだ。反対派に常務の座から引きずり降ろされた結果になったが、そうなればなるほど私の電力への熱意が燃え盛る。

少し悲しかったのは、妻のふさの態度である。

ふさは、私が家庭も子どもの養育も顧みず、名古屋に頻繁に行くことにいい顔をしなかった。

私が電力という生涯をかけてもいい夢を見つけたというのに、ま

まったくそれを理解しようとしなさい。水力発電を日本中に広げる夢は、福澤先生の夢でもあったと説明しても関心を示さない。

私にも反省すべき点が多々あるが、反対派によって常務取締役を辞任せざるを得ない事態を招じたことについても、「自業自得」と切り捨てたのである。

「あなたの今までの行動が招いた結果ではありませんか」と極めてつれない態度だ。

ふさに私の夢を理解してほしいとは思わないが、それでも少しは応援してくれないものだろうか、切ない気持ちになったのも事実である。

私は家庭を追い出され、会社を追い出され、どこにも居場所がない。私という人間は、居場所がなくなればなくなるほど、暗く陰鬱いんうつになるのではなく、籠かごから飛び出し、自由を得た鳥のように大空を羽ばたくのだ。

私は、水筒と握り飯を腰にぶら下げ、供の者と二人で山に入った。木曾川を眺めていると、私の心から反対派への恨み辛つらみなど薄汚いものが流れて消えていく。

「木曾のナー 中乗りさんは

木曾の御岳おんたけさんは ナンジャラホイ……」

供の者が歌う木曾節が耳に心地よい。

「ナンジャラホイだ」

私は力強く山道を踏みしめた。

くくくく